湖東三山

伝承あふれる天台宗寺院

湖東三山とは、龍應山　西明寺（犬上郡甲良町）、松峯山　金剛輪寺（愛知郡愛荘町）、釈迦山　百済寺（東近江市）の3つの天台宗寺院の総称です。鈴鹿山脈の西山腹に位置し、永源寺とともに紅葉の名所としても有名です。

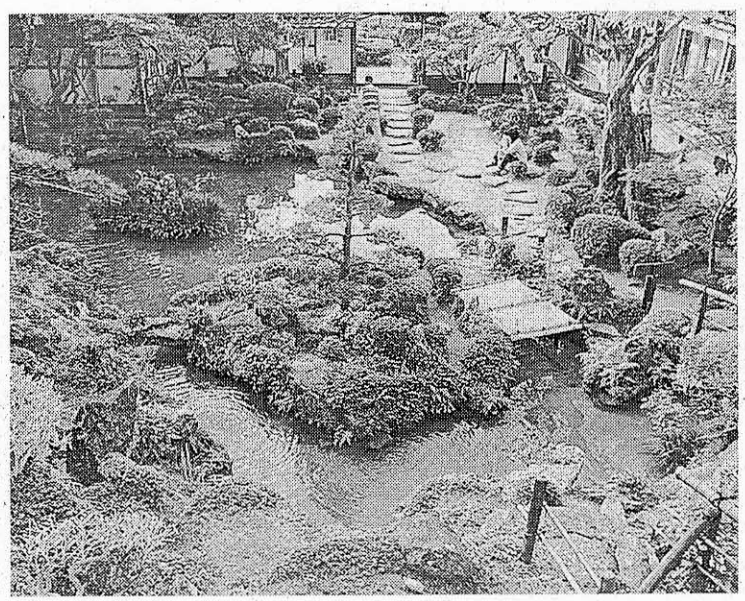
西明寺は、薬師如来を本尊とする、西国薬師四十九霊場第三十二番札所です。承和元年（834年）、三修上人の開基とされています。三修上人は、伊吹山を開山したと伝えられる半ば伝説化した行者です。

西明寺の開山伝承によると、ある日、琵琶湖の西岸にいた三修上人は、対岸の山に紫の雲がたなびくのを見て不思議に思いました。そこで神通力を用いて湖面を飛び越え、対岸に渡ると、今の西明寺のある山の中の池から紫の光がさしています。三修上人がその池に祈念すると、薬師如来の像が出現し、そのお姿を刻んで祀ったのが寺の始まりだとされています。寺のある場所の地名を「池寺」というのは、この伝説に基づいています。第25話で、平安時代の人々にとって琵琶湖は、天台宗の根本如来である薬師如来の浄土として意識されていたというお話をしましたが、この開山伝承もその流れをくむものといえます。承和3年（836年）には仁明天皇の勅願寺となり、寺領が寄進され、諸堂が建築されました。「西明寺」の寺号は、開山伝承において紫の光が西の方へ差していたことによります。

金剛輪寺は、松尾寺とも呼ばれます。本尊は聖観音で、開基は奈良時代の僧・行基とされています。行基は架橋、治水、潅漑などの社会事業にも尽力し、民衆の絶大な支持を得ていたとされ、行基の開基とされる寺院も大阪府や奈良県を中心に各地にあります。行基がこの地に金剛輪寺を建立したのは、天平9年（737年）、あるいは天平13年（741年）と伝えられています。

行基の創建伝承については定かではありませんが、当初は観音を祀る小堂であったと考えられています。その後、平安時代に入り嘉承年間（848—851年）には天台宗の高僧・慈覚大師円仁によって再興されたとされ、円仁を中興の祖としています。なお、金剛輪寺の所在地は、かつては秦川村といったことから、渡来系氏族の秦氏と関係があるという見方もあります。寺内には平安時代後期から鎌倉時代の仏像が多く残り、現存する本堂は、弘安11年（1288年）、近江守護佐々木頼綱の寄進を得て建てられたものです。

百済寺は、本尊は十一面観音で、推古天皇14年（606年）、聖徳太子の開基とされています。開山伝承によると、聖徳太子は当時来朝していた高麗の僧・恵慈とともにこの地に至ったとき、山中に不思議な光を見ます。その光の元を訪ねていくと、霊木の杉でした。太子はその杉を、立ち木のまま刻んで十一面観音の像を作り、像を囲むように堂を建てました。これが百済寺の始まりであるといい、百済の龍雲寺にならって寺を建てたので百済寺と号したというのです。



▲
西明寺庭園の池

百済寺が史料に初めて現れるのは11世紀の寛治3年（1089年）で、聖徳太子創建伝承が史実を反映したものかは不明です。けれど百済寺という寺号から見て、渡来系氏族の氏寺として開創された可能性が高いといえるでしょう。平安時代には、比叡山延暦寺の勢力下に入り、天台宗の寺院となっています。

平安時代から中世にかけて、かなりの規模をもった寺院だったようですが、明応7年（1498年）の火災、文亀3年（1503年）の兵火という2回の火災で、建物、仏像、寺宝、記録類などはほとんど焼けてしまいました。

さらに天正元年（1573年）には織田信長の焼き討ちに遭い、全焼しています。当時、この地に勢力をもっていた佐々木六角氏は、観音寺城の支城である鯰江城を百済寺の近くに築いていました。信長は自分と敵対していた佐々木氏に味方するものとして、百済寺を焼き討ちしたのです。こういう経緯を経たため、本堂をはじめ現在の建物は近世以降に再建されたものです。

紅葉の名所は、不思議な伝承や渡来系氏族の祈りを秘めた聖地でもあったのです。

（財団法人滋賀県文化財保護協会　阿刀弘史）